



施設一体型小中連携教育校というこれまでにない新しいシステムの学校で、九か年の子どもたち

と一緒に生活していることへの感謝の気持ちとともに「教育」の素晴らしさやその大切さを実感しながら「教育」について考えることのできる毎日である。

「よく見れば薺花さく垣根かな」という芭蕉の有名な句がある。薺（なずな）は30〜50cmの茎の上部に小さな十字形の花を多数つけ、後に逆三角形の平たい果実を結ぶ。この形が三味線のバチに似ているところから三味線草、ペンペン草とも呼ばれ、春の七草の一つで七草粥の材料となっている。

芭蕉のこの句は味わい深い句で、薺は路傍の雑草なので、ふと心をとめて見ることもしなければ、その小さな花に気付くものではない。そこで、芭蕉は「よく見れば」と詠んで、垣根の根元の薺に命の息吹を感じとり、薺も時と場所を得てその盛りを迎えているんだと強く感じたのだろう。

草木に限らず人間も同様である。いや人間であればなおさらその存在を心に刻み、一人ひとりを大切にしていかなければならない。確かに薺はよく見なければ分からない。しかし、人間はよく見なければ分からないということがあつてはならない。常にその存在を意識して過ごさなければならぬ。

我々に大切なのは、子どもたちの声にならない心の叫びを心の耳を澄まして聞き入れることである。「教育」とは教育技術だけではない。我々が如何に生きるべきか、人生をどうまとめ上げるか、四苦八苦し、闘っている教師の姿勢が言外に子どもたちに伝わり、子どもたちの学ぶ姿勢ができていく。「教育」とは自分自身の生き方そのものと心すべきである。

これまで通りが通用しない毎日であるが、元来「教育」が求める方向は「子どもたちが将来社会に大きく貢献できる人物として育つてくれる」ことである。「学校」には「強い生命力と人間味のある魅力ある人間を育てる」ことが求められるており、「人格を磨けば、学力も伸びる」のである。教育の理想を求めらるならば、教師はどれほど修養に努力してもなお足りないことがわかる。それには、自分の信念を貫き、不安に打ち勝つ精神力を持つことが大切であり、大きな仕事を成し遂げるためには自分に負けることなく、自分を制していかなければならぬ。

### 小学校・中学校を兼務して

山陽小野田市立厚陽小学校長 神 徳 良 信

# 飛 耳 長 目

### 海の学校、山の学校の交流を通して

柳井市立日積小学校長 吉 田 博



柳井市の南、瀬戸内海に浮かぶ平郡島の平郡東小と、柳井市の北東、山間部に位置する日積小との交流が始まったのは、平成二十四年。この年は、どちらの小学校も一年生が一名。たった一人で勉強する一年生同士の手紙のやりとりから、そのうち「会っていつしよに勉強したい。」という思いで、互いの学校を訪問したのが、平成二十五年二月（日積小訪問）と三月（平郡東小訪問）だった。

ものがあり、子どもたちへの温かい声かけ、教育活動への積極的な参加・協力など、地域の学校への応援には頭が下がるばかりである。また、過疎化・少子化の流れの中で、ふるさとの活性化を図りたいと町おこしに地域ぐるみで取り組む姿は、子どもたちのよい刺激になっている。互いの学校を訪問した子どもたちは、海・山の学校での経験だけでなく、地域の方々から優しさや知恵、積極性など豊かな心を育む大切なものをたくさんいただいた。

平成二十五年度からは、平郡東小に転入生が増え、全校ぐるみで交流学習を行うことになり、年七回の交流学習（日積小で六回、平郡東小で一回）を通して、地域の文化・人材を活用し、豊かな自然環境など互いの学校の特色を生かした教育活動を展開し、豊かな心と確かな学力を育むことをねらいとした。

海の子どもが山の学校で、山の子どもが海の学校で学習する交流学習が二年間で十四回も実施できたのは地域・保護者・教育委員会など多くの方々のご支援のおかげである。朝六時前に集合し船の中で朝食・仮眠をとって往復した子どもたちの頑張りも大きい。これからも交流学習をみんなの力で有意義なものにしていきたいと思う。

交流学習を行って一番強く感じたことと、それは二つの校区の方々の優しさと温かさである。自然の恵み・美しさもさることながら、地域の方々の学校・子どもたちに対する思いには、特別な